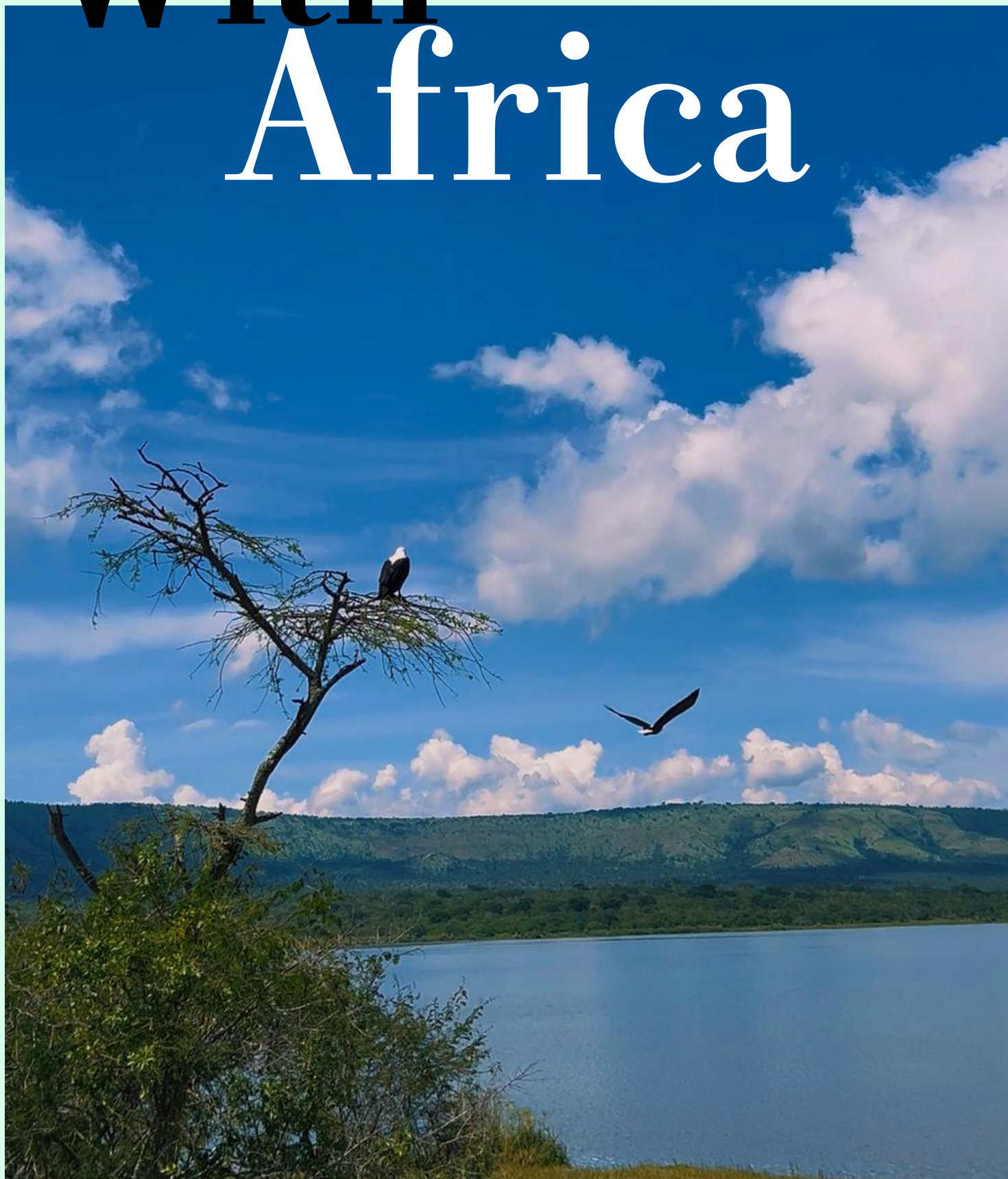


VOL. 6 2026年

With Africa

Sophia Africa Weeks Project



With Africa

Vol.6 2026年

※本雑誌における「アフリカ」は、北アフリカ諸国、サハラ以南のアフリカ諸国（サブサハラ・アフリカ）、および島嶼部を対象としています。

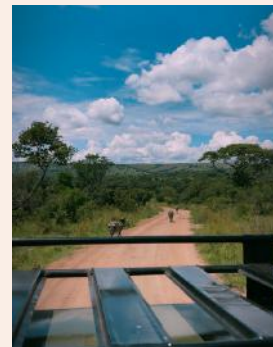


【COVER】

Place/ルワンダ

(Akagera National Park)

Photo/社方菜南花



【BACK COVER】

—CONTENTS—

INTRODUCTION

- 02 アフリカの旅へようこそ
Ubuntu —あなたがいるから、私がいる—

CULTURE

- 03 アフリカ料理ってどんなの？
アフリカWeeks実行委員が食べてみた！
マフェを実際に作ってみた！
- 04 旅の中で見つけた音楽
- 05 アフリカのファッションについて知ろう！
- 06 アフリカの若者文化の最新動向を教えて！

INTERVIEW

- 07 アフリカを舞台に働く卒業生
- 08 共に生きる
- 09 どんなレンズでアフリカを見えていますか？
10

10TH ANNIVERSARY

- 11
12 アフリカWeeks第10回記念企画

EVENT REPORT

- 13 アフリカWeeks2026開催報告
- 14 記念すべき10回目を迎えました
アフリカのこぼで「ありがとう」

—SPECIAL THANKS—

本誌の制作にあたり、ご協力ご支援いただいたすべての皆さまに心より感謝申し上げます。
皆さまのお力添えにより、アフリカWeeks10回目という節目を一冊の形にすることができました。
ありがとうございました。

アフリカ料理レストラン「カラバッシュ」、Justinoさん、Johnさん、井筒悠和さん、
平山杏樹さん、Mukadi Ilunga Christianさん、鈴木美保さん、大塚せなさん、
Taha Al Wakilさん、Mcline Ekeさん、山崎瑛莉さん、山下哲司さん

アフリカWeeksの公式SNSは
QRコードからチェック



アフリカの旅へようこそ

「アフリカ」と聞いて思い浮かべる景色は、一つだけではありません。ページをめくるたびに、新しいアフリカとの出会いが待っています。

Morocco

はじめに

アフリカの多彩な魅力をたっぷりご紹介します。多様な場所で活躍される方々のインタビューやアフリカWeeks10周年を記念した特別企画も掲載しています。この1冊をきっかけに、アフリカがあなたにとって、もっと身近な存在になりますように。どうぞ、最後までお楽しみください。

Ubuntu（ウブントゥ） —あなたがいるから、私がいる—

Ubuntuとは、南アフリカをはじめとするアフリカ南部で話されるバントゥー諸語に由来する言葉です。

「私は、私たちがいるから私である（I am because we are）」という考え方を中心としたアフリカの哲学です。

人は他者とのつながりの中で成長し、自分の幸福と他者の幸福は切り離せないという価値観に基づいています。そのため、競争よりも協力、独占よりも分かち合い、排除よりも共生を重視します。また、Ubuntuは単なる「優しさ」ではなく自分も相手も共に尊重し、共同体全体の幸福を目指す生き方を示しています。今年のアフリカWeeksでは、この「Ubuntu」をテーマに掲げました。

この言葉を胸に、アフリカの多彩な魅力に触れてみませんか？

Ubuntu 実は・・・

世界中で使われているオープンソースのOS（基本ソフト）の名称にも使われています。「誰もが自由に使い、知識や技術を分かち合う」という理念が、Ubuntuの精神と重なることから、この名前が付けられました。

アフリカ料理ってどんなの？

アフリカWeeks学生実行委員が実際に食べてみた！

都内にもアフリカ料理を提供しているお店があります。
今回は、大崎駅にある「カラバッシュ」というお店で
実際にアフリカWeeks実行委員がアフリカ料理を食べてみました。
都内でも手軽にアフリカ料理に挑戦できるので、是非行ってみてください！

カラバッシュ

ランチタイム 月～金 11:30～14:00 (L.O.13:30)
ディナータイム 月～土 17:30～22:00 (L.O.21:00)

〒141-0032 東京都品川区大崎 1-2-2
アートビレッジ大崎セントラルタワー 2F
TEL. 03-3433-0884

<https://www.calabash.co.jp/>



料理編



エブヌエブヌ ABUNUABUNU

青菜ときのこと、肉や魚を唐辛子と煮込んだガーナ中部の料理です。かなり辛めです。(担当は辛い物が苦手なので、辛いもの好きの方はちょうど良いかもしれません。)
プルンとしているキャッサバと食べると、中和されて美味しかったです。



マフェ MAFÉ

ピーナッツのカレーです。
甘口で、辛い物が苦手な人でも美味しく食べられます。
アフリカ各地で様々な種類があります。



スンバラライス SOUMBALA RICE

西アフリカの納豆「スンバラ」を使ったご飯です。ピラフみたいにパラパラです。日本の納豆よりクセがなくて食べやすいです。隣には、チキンや野菜のソテーが添えてあります。
お肉も食べ応えがあります。



ヤッサ・ブレ YASSA POULET

たまねぎと鶏肉が入ったシチューのようなセネガル料理です。
「ヤッサ」というのはセネガルの言語でたまねぎという意味です。
「ブレ」はフランス語で鶏肉です。
ちょっと酸っぱめです。サラッとしていて食べやすいです。

軽食・飲みもの編



アロコ (揚げプランテン)

揚げたバナナです。加熱されると甘さが増して、トロツとします！



バオバブジュース

今回のアフリカWeeksのメインビジュアルでもあるバオバブの果のジュースです。
乳酸菌飲料のような優しい酸っぱさがあります。

マフェを実際に作ってみた！

材料 (4人前)

牛肉 (または鶏肉、ラム肉などお好みで)	400g
ピーナッツバター (無塩・無糖がオススメ)	大さじ 4
玉ねぎ	1個
パプリカ (赤)	1個
トマトペースト	大さじ 2
水またはスープストック (鶏がらスープや野菜だしなど)	500ml程度
ブイヨンキューブ (または顆粒だし)	1個
カイエンペッパー (辛さはお好みで調整)	小さじ 1/4
黒コショウ	少々
塩	適量
オリーブオイル	大さじ 2



←委員が実際に作ってみました！

ぜひ、皆さんも
ご自宅で作ってみてください！

作り方

- ①玉ねぎとパプリカをみじん切りする。
- ②肉を一口大に切る。
- ③大きめの鍋にオリーブオイルを熱し、中火で肉を焼く。塩と黒コショウを少々加え、表面に焼き色がつくまで8~10分炒める。
- ④みじん切りにした玉ねぎとパプリカを加え、さらに数分炒める。
- ⑤トマトペーストを加えて良く混ぜ、全体に馴染ませたら火を弱めて5分ほど煮る。
- ⑥水 (またはスープストック)、ブイヨン、カイエンペッパー、塩 (ストックに塩分がある場合は後で調整) を加えて強火で5分ほど煮立たせる。
- ⑦ピーナッツバターを加えて良く混ぜ、完全に溶けたら火を中火にして2~5分ほど煮込み、適度なとろみが出るまで加熱。
- ⑧肉にしっかり火が通れば完成！

レシピ監修：講師：山崎 瑛莉 (上智大学)

旅の中で見つけた音楽

実行委員が実際にアフリカに訪れて見聞きした音楽についてご紹介します。

タンザニアの雑貨屋、モンバサの風が吹き抜けるダウ船の上、そしてナイロビの活気あふれるキベラスラムの学校など、それぞれの場所で人々の生活に根ざしたユニークな楽器たちに出会いました。



Tanzania

カリンバ (Kalimba)

タンザニアのダルエスサラーム市内の雑貨屋で13000TZS（約800円）で購入しました。日本の観光客もよく訪れるお店らしく、現地タンザニア人の店員さんは日本語を話して歓迎してくれました。カリンバはアフリカ各地に深く根ざしている伝統的な「親指ピアノ」の総称で、両手で持ち親指で弾きます。音はオルゴールのように素朴で優しく、現地では歌の伴奏や物語の背景音楽として親しまれています。

↓カリンバの音声はこちらから↓



↓船上での音声はこちらから↓



ダルブッカ (Darbuka)

ケニアの港町モンバサの街を歩いていると現地の人たちに誘われ、伝統的な木造帆船である「ダウ船」に乗りました。2600KES（約3000円）ほどで港を周る3時間の船旅でしたが、夕方にインド洋へと繰り出すと美しい夕焼け空が広がり、非常に素晴らしい景色でした。心地よい波音に包まれる船上で、船頭の若い男性たちが演奏でもてなしてくれた楽器がこのダルブッカです。脇に抱えて叩く杯型の片面太鼓で、かつて中東からインド洋交易を経て伝わったものであり、風の音や波音に美しく調和する沿岸部の伝統音楽「タラブ」には欠かせない打楽器です。

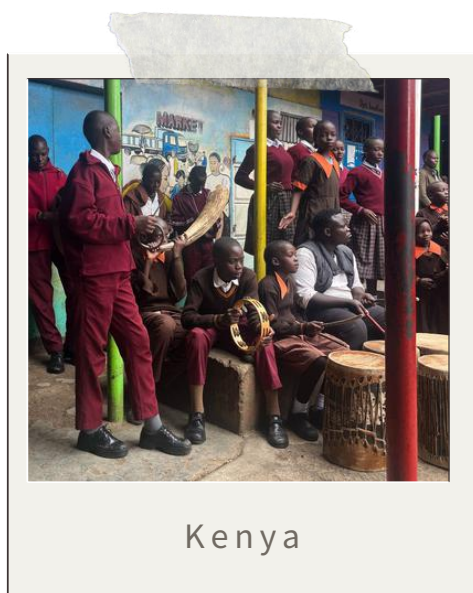


Kenya



Kenya

ンゴマ (Ngoma) ・ クドゥホーン (Kudu Horn)



Kenya

アフリカ最大のスラムと言われるケニアのキベラスラムに赴き、その中にある小学校を訪れました。そこでは子どもたちが歓迎してくれ、力強い歌やダンスを披露してくれました。写真右のンゴマは丸太と動物の皮で作られた大型太鼓で、地響きのような重低音を出します。写真左のクドゥホーンは野生動物の角で作られた角笛で、「ブォー」と豪快な高音を響かせます。スワヒリ語の「ンゴマ」には「太鼓」だけでなく「踊り」や「お祭り」の意味もあり、子どもたちのエネルギーの強さを感じました。

↓子どもたちの演奏はこちらから↓



アフリカのファッションについて 知ろう！

そのカラフルでユニークなファッションが魅力的なアフリカですが、詳しくは知らない方も多いのではないのでしょうか。

このページでは、数あるアフリカのファッションの中から、特にアフリカプリントについて取り扱います！

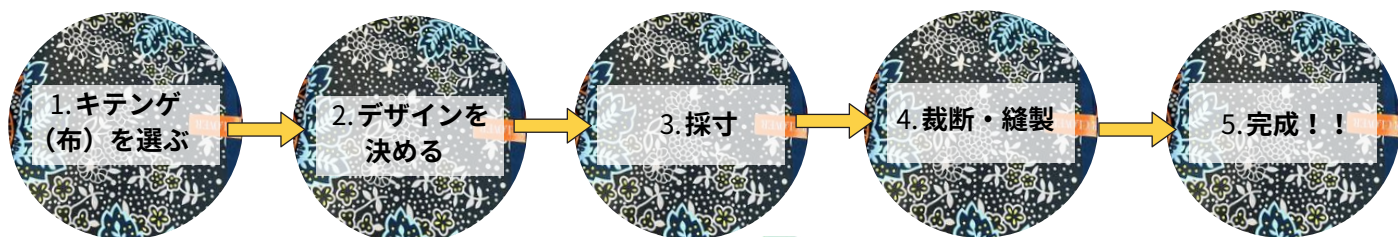
ぜひカラフルで美しい写真もあわせてお楽しみください！

アフリカプリントは、元々ヨーロッパ人による「アフリカらしい」デザインから生み出された、欧米生まれのプリントです。

しかし、現地の消費者に受け入れられ、取捨選択されることで、これまで発展を遂げてきました。

現在では、アフリカ人の思いも投影され、アフリカ人意識の象徴となり、アフリカの魅力あふれる代表的な布となっています。

実行委員が実際にアフリカに訪れて体験してきました！



柄も色もさまざまで、
布選びにもつい時間が
かかってしまいます。

自分の体にぴったり
合うサイズに
してもらいました。

余った布で
何を作ろうか考える
のも楽しいです。



アフリカプリントにはさまざまな柄とその意味があります！

① 愛国心の表現

仏語圏アフリカは、ほとんどの国が1960年代に独立を果たしたばかりで、愛国心にあふれています。
国の祝祭日には、国旗の色や歴代大統領をモチーフにしたパーニュ（チューブスカートのように腰回りに巻く長方形の布）を用いて愛国心を表します。

② 選挙での利用

選挙の際には、プロパガンダの手段として「選挙パーニュ」が用いられることもあります。
これは施政方針への信奉を視覚的に誇大して見せることが目的で、実際に自らのポートレート入りのアフリカプリントを25万ヤード（約23万メートル）注文した大統領もいました。

③ 告白の手段

アフリカプリントは、時に女性たちの思いを伝える手段となりました。バリエーション豊かで、純真さを表す「婚礼の花」や射止められなかった悔しさ・寂しさを表すものなどさまざまです。

スワヒリ語で書かれたカンガのメッセージをご紹介します！

※カンガは、中央に格言が入っているのが特徴的な長方形のプリント生地

Nakutakia kila la kheri!
いいことが沢山ありますように！

アフリカの若者文化の 最新動向を教えて！

アフリカの若者文化というと、皆さんは何を思い浮かべますか。
このページでは、学生実行委員が出会った、JustinoさんとJohnさんの2人の若者にインタビューを行いました。

モザンビーク出身のJustinoさん

Justinoさんは、エドゥアルド・モンドラーネ大学 3年生です。
若者の「起業」文化と「エンタメ」について共有してくれました。

～若者の起業文化～

若者たちは活発にビジネスを始めているそうです。まず、国の特徴として25歳以下の若者が人口を多く占めています。彼らは学校、そしてビジネス関係のイベントを通して、仲間やビジネス関係者に会い、積極的にビジネスを起こしているそうです。

また、SNSを活用してプロモーションも盛んに行います。
将来、Justinoさんもグローバルな企業を展開したいそうです。

～エンタメ～

公用語がポルトガル語と同じであることから、ブラジルのエンタメも親しまれているとのことです。Justinoさん自身、人々がブラジルのドラマを観ることで、ブラジルポルトガル語のアクセントの影響を感じるそうです。同時にモザンビークの音楽である、Amapiano、Kizomba、Marrabentaも人気だと教えていただきました。

～Justinoさんからのメッセージ～

日本の学生みんなに知ってほしい。モザンビークは豊かな文化、フレンドリーな人々、美しい音楽、そして力強い伝統がある国なんだ。経済的な課題はあるけれど、若者たちはクリエイティブで、ポジティブで、すごく努力家だよ。

そして最後に、モザンビークの人たちはとてもウェルカムな気質で、
私たちは音楽やダンス、文化、そして人とのつながりを心から愛しているんだ。



アフリカ大陸の南東に位置し、
首都はマプト。
公用語はポルトガル語。

シエラレオネ出身のJohnさん

Johnさんは、東京基督教大学 4年生です。

若者に人気である、
「旅行」と「ラップ」について教えてもらいました。

～旅行～

若者にとってホットなことの1つ目は「レジャーとしての旅行」です。もともと、ビジネスや家族訪問でしか旅行をしない傾向があったそうですが、現在若者の間では、気軽に国内外の旅行に行きます。ちなみに、国内で人気な場所は「Kabala」という山とチンパンジーの「Tacugama」だそうです。旅行先に親戚が住んでいることも珍しくなく、親戚間での「おもてなし」は暖かいものだそうです。

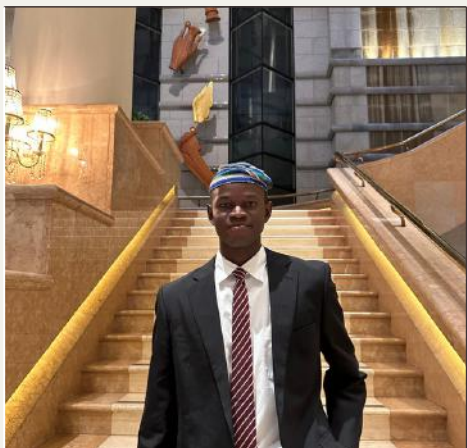
～ラップ～

ホットな音楽は、クレオール系のラップ！音楽として楽しむことはもちろん、「これが本当の私たちだ」とアイデンティティの主張にもなっているそうです。おすすめのアーティストとして、Drizilik, The Therapist, Boii, Zainab Sheriff, LAJ, Kao Denereoを挙げていただきました。

～Johnさんからのメッセージ～

シエラレオネの文化は、とても温かいことで知られているんだ。宗教に対してもすごく寛容だね。ビーチもあるし、こうした素晴らしいものがたくさん詰まっています。だから、日本の皆さんには、アフリカを一括りの「大陸」として見るだけじゃなくて、今すぐ行けるくらい平和で、すごくクールで、本当にフレンドリーな国々がそこにあるんだってことを、ぜひ知ってほしいな。今日にでも荷物をまとめてシエラレオネに行けば、絶対に楽しい時間を過ごせるよ。帰ってきたら、また学校の授業に出たり仕事をしたり、自分の日常に戻ればいいんだから。

でもとにかく、ぜひ行ってみて！



アフリカ大陸の西に位置し、
首都はフリータウン。
公用語は英語。

インタビュー後記

今回、「アフリカWeeksのイベントで取り上げられてない国についても、もっと知ってほしい」という強い思いから、お二人にインタビューをした。実際、私自身が知らなかったアフリカの若者のトレンドについて知ることができ、とても興味深かった。特に、モザンビークの「起業文化」やシエラレオネの「ラップ」は、同国の若者のエネルギーを感じさせるものであった。本記事をきっかけに、同国に興味を持っていただけたら、本望である。

浅井唯子

アフリカを舞台に働く卒業生

大学での「アフリカ」についての学びは、社会人としてどのように生かすことができるのでしょうか。現在「アフリカ」に関わるキャリアを築いていらっしゃる二人の先輩方にインタビューをしました。



お話を聞いた先輩



井筒悠和さん

総合グローバル学部23年卒
国際文化交流事業に従事

お仕事内容とやりがいを 教えてくださいませんか？

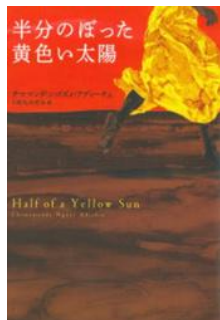
日本語教育を促進することを目的に、海外の日本語教育を行う高等教育機関や日本語学校の支援をするという業務を行っています。私はアフリカ・中東地域を担当しており、去年はマダガスカルでの会議に出席しました。大学時代には、日本語教育に触れることはなかったのですが仕事を通じて新しい角度からアフリカを学ぶことができ面白いです。

大学では何について勉強されていたのですか？

卒論ではナイジェリアの地域間対立とバランス政策をテーマにしました。ナイジェリアは250を超える民族が存在する国です。現在は、特定のグループに権力が独占されることを防ぐため、政府ポストにおいて出身地域、民族、宗教のバランスをとる仕組みがとられています。ナイジェリアは独立後、東部地域の分離独立を主張する内戦が起きました。授業のブックレポートとして、※この内戦（ビアフラ戦争）をテーマにした小説を読んだことがナイジェリアに関心を持ったきっかけになりました。※詳細は下記をご参照ください

大学での学びを生かすとは？

仕事をする上で、大学での学びは想像力として生きていると思います。行ったことがない地域でも、今まで勉強してきた知識があるからこそ、現地の社会経済状況をイメージすることができていると思います。私はアフリカだけを見て就活していたわけではありませんでした。選んだキャリアの延長線上で、いつかアフリカと関わりたいなと考えていたので、今の仕事でアフリカ地域を担当できているのは、とてもラッキーだと思います。実際仕事をしていて感じているのは、今の私みたいにアフリカに関わる仕事をしていても、大学で学んだ知識がそのまま問われる場面は少ないということです。むしろ日々の業務では、大学時代に培った、情報収集力や相手に整理して伝える力、語学力が生きていると感じています。



『半分のぼった黄色い太陽』

チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ著（ナイジェリア出身）

1960年代のビアフラ戦争下を生きた双子の姉妹の物語。知識人一家に生まれた彼女たちの美しく知的な日常は、100万人以上が餓死したとされる凄惨な戦場へと一変する。極限状態のなかでの人間の強さと弱さ、愛や家族関係を描いた作品。



お話を聞いた先輩



平山杏樹さん

総合グローバル学部21年卒
独立行政法人国際協力機構（JICA）勤務

お仕事内容とやりがいを 教えてくださいませんか？

現在はタンザニアに赴任しており、総務として経理・調達などJICA事業を陰ながらサポートする業務を担当しています。学生時代には、ここまで自分の好きなことをやり通せている社会人になれるとは思っていませんでした。もちろん上手いかわないこともありますが、ずっと憧れていたアフリカで働くという夢を叶えられている事をとても贅沢に思っています。

大学では何について勉強されていたのですか？

上智の授業では文化・歴史・政治といった様々な分野を学習しました。また、大学のプログラムでカメルーンに渡航したり、南アフリカに留学に行くなどもしました。カメルーンでは、授業で学んだ貧困や紛争を目の当たりにした一方で、活気ある街の様子も見て、私のアフリカに対するイメージが変わりました。また、実際にアフリカに長期滞在したいという思いが強まり、留学を決意しました。そこでは、南アフリカ人だけでなく、コンゴ、ガボンといったアフリカ各国からの留学生とも交流するという経験ができました。留学先では、アフリカ企業を事例とした経営学を学び、帰国後は南アフリカにおけるマイクロファイナンスの活用事例をテーマに論文を執筆しました。

大学での学びを生かすとは？

今の仕事には、幅広い分野について学んだ経験が、一つの案件を多角的に捉える力として役立っていると思います。アフリカに関わる仕事ではなくても、このような学んできた過程は、社会人として生きてくると思います。これからも私は、幅広い地域や分野でキャリアを積むことになります。社会人としての目標は、誰にも負けられないと言えるぐらいの自分の強みを見つけ、周りから頼られるようになることです。

共に生きる



Mukadi Ilunga Christian (ムカディ・イルンガ・クリスチャン)

コンゴ民主共和国出身。イエズス会の宣教師として派遣され、2026年9月で来日9年目を迎える。来日後は1年半日本語教育を受け、その後、上智大学カトリックイエズス会センターで1年半勤務。その後、上智大学神学部で勉強。現在は哲学と神学を中心に研究。

日本に初めて来た時、印象に残ったことはありますか？

色々ありましたが、成田空港に到着して一番最初に印象的だったのは、マナーですね。空港の人たちもとてもマナーを重視しているし、水や道路もきれいな国だと感じました。そして、静けさを感じる国ですね。オープンでフレンドリーな私の国とは全然違って、日本はお互いの境界線を守る文化だとすぐに感じました。

もうすぐ日本での生活が9年目になりますが、 その中で気付いた文化の違いなどはありますか？



異文化との出会いということに注目して、私は『Au Pied du Mont Fuji』（日本語訳で『富士山の麓で』）という小説を2025年に執筆しました。外国人として日本に来て、どういう経験をしたかを描いたものです。一つ感じたのは、日本では、いくら頑張っても、いくら日本語を話しても、まだ「外国人」であるということですね。日本人と外国人の

区別がはっきりしているように感じます。

しかし、そうした異文化との出会いは、自分のルーツやアイデンティティを考え直す機会にもなりました。アフリカ人として日本で自分に何ができるのか、何を学べるのかを考えるきっかけになったのです。

私は日本人にはなり得ないと思う一方で、自分のアイデンティティに立ち返りながら、異なる言葉や文化、価値観を持つ人たちと一緒に生きていく可能性はあると信じています。

異なる文化の人たちと一緒に生きていく中で、大事なことは何だと思いますか？

一番重要なのは、互いに尊敬し合うことだと思います。そのためには、まず知り合うことが必要です。異文化との出会いは、衝突を生むこともあれば、互いに協力し合って歩いていくことにもつながります。衝突する原因は、異文化を知ろうとしないことで偏見や批判的な言葉につながるからです。知ることによって理解することもできるし、共に暮らし、共に生きる可能性も生まれてきます。自分とは異なった考え方をする人との出会いによって、自分が世界の中心ではなく、世界における一つの立場であるということに気付くことができます。なので、オープンマインドで生きるということが重要だと思います。

AW実行委員)

人を理解するという点で、今年のアフリカWeeksのテーマ「Ubuntu」と通じる部分があると感じます。(※2ページ参照)

ムカディさんにとって、Ubuntuとはどのようなものとお考えですか？

まずは背景の理解が必要だと思います。南アフリカには、アパルトヘイトという不平等や偏見の歴史があります。Ubuntuとは、そうしたものを乗り越え、人間らしく生きるために何を大切にするかということだと思います。

根底にあるのは、何人であろうと人間であるということです。そして、私たちは関係性の中で生きています。「I am because you are. (あなたがいるからこそ、私がいる)」という言葉がその根本にあります。

今の私があるのも、これまでの出会いや関係性があるからです。「私」という時には、同時に「あなた」が存在している。相手がいないければ、私も成り立たないのです。

日本では「私は関係ない」と言うことがありますが、私はそうは思いません。日本社会には「間柄」という考え方がありますが、私たちは関係性の中で生きているという意味で、Ubuntuと通じるものがあると感じます。そういった深いレベルの関係性を意識することで、相手の重要さに気づき、相手を尊敬することの大切さにも気付くことができます。だからこそ、支配的な関係や差別的な関係は、本来の関係ではないということも理解できると思います。

ムカディさんの研究の一つである「見えない暴力」について教えてください。

私たちが「暴力」と言う時、戦争や奴隷制度、人を殴ることなどをイメージすることが多いと思います。しかし、暴力というのは物理的なものだけではありません。人間の繁栄 (flourishment) に反することも暴力なのです。つまり、人間の人権や尊厳、人間の尊さを重視しないということです。

そのため、物理的な暴力だけでなく、制度や考え方、言葉といった構造的な暴力にも目を向け、その言葉や行動が人間の成長や繁栄を促しているのかを基準に考えることが重要です。例えば、子どもが反抗しても、親が「学校に行きなさい」と言うことは、一見すると強制しているように見えるかもしれませんが、それは子どもの成長や繁栄のためを思っているという点で、暴力とは言えません。逆に、いじめは、決して人間の繁栄に良い影響を与えません。

私は、見えない暴力というものを、マイクロアグレッションとは区別して考えています。あまりにも全てを虐待やハラスメントと判断してしまうことは、分けて考えたいですね。

国際的な問題に取り組みたいと考えている学生にメッセージをお願いします。

2つのキーワードを伝えたいと思います。

一つ目は、「興味」や「好奇心」を持つことです。自分が生まれた土地で世界が終わるわけではなく、世界はもっと広いということに気づき、若いうちに多くを学び、経験し、人とつながりながら世界の見方を広げてほしいと思います。興味や好奇心はパッションにつながります。アフリカに限らず、自分が価値を感じるものに興味を持つことが大切です。

二つ目は、「出会い」を大切にすることです。出会いとは人格と人格のつながりであり、それぞれが興味や目的を持って出会うことで、そこから何かが生まれます。さまざまな国際問題がある今だからこそ、自分の関心のある分野を持って人と出会うことが重要だと思います。

最後に、日本とアフリカの若者が協力してできることは何だと思いますか？

一つの重要なステップとして、まずは同じ場に座って理解し合い、言語の限界を超えて話すことだと思います。日本語や英語などの言語は単なるツールであり、話したいという好奇心があれば、心と心で話すことができます。

私が仲間と一緒に設立した「Africa Conversation Series」では、日本とアフリカの若者が上智大学で月に一度集まり、お互いに学び合いながら、自分たちに何ができるのかを一緒に見つけていくことを大切にしています。



公式Instagram: @africaconversationseries

INTERVIEW | 8

日本から、 どんなレンズでアフリカを見ていますか？



同じ「アフリカ」という言葉を聞いても、人によって思い浮かべるものは異なります。

それは、出会ってきた人、これまでの経験、

そして学んできたことが違うからかもしれません。

今回は、あえてアフリカに関わったことのない学生2名にインタビューを行いました。

アフリカに詳しい人ではなく、学生が抱く率直なイメージや関心を知ること、
読者のみなさんにも身近な視点からアフリカについて考えてもらいたいと考えたためです。
それぞれの視点を通して見えてきたアフリカの姿に注目してみましょう。



お話を聞いた学生



鈴木 美保 さん

総合グローバル学部 同学科4年
アジア地域研究専攻



大塚 せな さん

外国語学部 フランス語学科4年
ヨーロッパ研究コース(歴史・文化分野)

現在どのような勉強をしていますか？

美保さん)

アジア地域研究の中でも、現在はベトナムにおけるインクルーシブ教育の発展について研究しています。



せなさん)

卒業制作では「ナショナル・アイデンティティ」をテーマに研究しています。他者が求めるアイデンティティと自分自身が考えるものの間にはどのような違いがあるのかについて考えています。

アフリカに対してどのようなイメージを持っていますか？

美保さん)

アフリカと聞くと、いつも国際協力や国際開発が行われている地域というイメージがあります。よくそういった事例を特に大学での勉強やお話で聞いたことが影響しているかもしれません！このイメージをポジティブに捉えられる一方で、その支援は本当にアフリカ地域のことを想っているのかなのか、疑問に思ってしまうときもあります。



せなさん)

最初に浮かぶのは『ライオン・キング』！小さい頃から観いたので、自然の印象が強くあります。フランス留学中に会ったチャド出身の子から、「家の近くにライオンがいた」という話を聞いたこともあります。あとは、モロッコやマダガスカルといった国を思い浮かべるかもしれません。モロッコはフランス留学中に訪れる学生が多く、行ってみたい国の一つになりました。マダガスカルは固有種や島ならではの自然に惹かれて、印象に残っています。

AW実行委員)

それぞれの触れてきた環境や、大学の研究もイメージの形成につながってるかもしれないですね！

アフリカへのイメージはどこから来ていますか？

美保さん)

研究を通して、国際協力や開発について考える機会が多いからだと思います。その中で、アフリカで「もし国際協力がなければどんな感じなのか」と考えることがあります。また、関連して、特に支援など、外部からの関わりが社会にどのような影響を与えるのかに関心があります！

せなさん)

映画やNHKのドキュメンタリーの影響が大きいと思います。コンゴのファッションに関するドキュメンタリーを見たこともあります。そういったメディアを通して形成されるイメージは大きいかもしれません。

アフリカについてもっと知りたいことはありますか？

美保さん)

アフリカといってもとても広大なので、まだ一つひとつの国について知らないことが多いと感じています。だからそれぞれの国の文化や歴史をもっと目を向けていきたいです。また、自分のような学生は他にいると思うので、もっとそういったことを知る機会が多くあったらいいなとも思います。

せなさん)

特に食事について知りたいです。大学の講義でアフリカ料理の紹介があったときに、実際に食べてみたくなりました！また、留学中に会ったチャドやベナン出身の子が料理をととても丁寧に作り込んでいたので、とても気に入っています。

最後に、読者へメッセージ

— 世界の学びを深めるために大切なこととは—



美保さん)

自分が見ている世界や学んできたことが、必ずしもすべてではないと思っています。大学での学びを通して、何かについて考えるときは、「誰の視点なのか」「当事者はどう感じているのか」を意識してみることも大切だと感じてきました！アフリカについて考えることもきっと同じことが言えると思います。そして、大学には新しい価値観や出会いがたくさんあってとても楽しいです！ぜひいろいろなことに挑戦してみてください。

せなさん)

あるアフリカWeeksイベント後、前学長とお会いした際に「自分の興味ないこともやってみてほしい」という言葉をかけてくださったことがずっと心に残っています。自分が興味ないことでも、楽しめないって思うことでも、足を踏み入れてみると意外に面白かったり、自分の研究との接点を見つけられたりと新たな出会いがあると実感しています。ぜひいろいろなことをやってみてほしいです！

10ページ▶▶ 00 アメリカの学生が捉えるアフリカとは...？

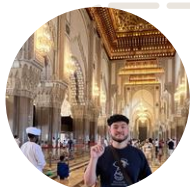
アメリカの学生から見たアフリカ



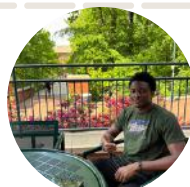
アメリカは自由と多様性を掲げる一方で、人種や移民の歴史とも深く結びついています。
そのような社会で、アフリカにルーツを持つ人々は
どのようにアイデンティティを形成しているのでしょうか。



お話を聞いた学生



Taha Al Wakil
タハ・アルワキルさん
アメリカ合衆国出身



Mckline Eke
マクライン・エーケさん
カメルーン出身

出身またはルーツを教えてください



タハさん)

私は母がインドネシア出身、父がモロッコ出身のアメリカ人です。

マクラインさん)

私はカメルーン出身で、2025年の冬に教育とより多くの機会を求めてアメリカにきました。

現在は大学でどのようなことを勉強されているのでしょうか？

タハさん)

現在4年生でスポーツ科学を勉強しています。大学院への進学も視野に入れているところです。

マクラインさん)

コンピューター専攻でシステムやネットワークについて勉強しています。現在、1年生です。自分でゲームを作ろうと思ったことがきっかけです。

アフリカにルーツを持つお2人はアフリカ(特にタハさんはモロッコ、マクラインさんはカメルーン)をどのように捉えていますか？

タハさん)

アフリカ、とりわけモロッコについては将来性があり、国際社会において大きな役割を持つ国だと感じています。それはモロッコがアフリカ大陸の先端にあり、地理的にもヨーロッパとアフリカを繋ぐ架け橋であると考えからです。モロッコは限りないポテンシャルを持ちながら、これまでも発展のために努力をしてきました。その努力が世界的に認められた例として、2030年のFIFAワールドカップの会場の1つに指定されたことが挙げられるでしょう。

マクラインさん)

私はカメルーンが現在発展している状態にある国だということを実感しています。カメルーンはいまだに国内の政治や経済に波があります。その一方で、間違いなく国として進化していると感じるところもあるからです。メディアでは、カメルーンのネガティブな側面が映し出される傾向にあるように感じます。しかし、カメルーンには美しい建物や観光事業に向けた施設や制度の整備、美しい自然といったポジティブな面も多くあります。特にカメルーンは「アフリカのミニチュア」と呼ばれており、資源や多様な人、自然に溢れています。

アメリカにいるアフリカンとして何か感じることはありますか？

タハさん)

やはり、コミュニティを見つけるのが難しい点が挙げられます。ワシントンD.C.やニューヨークといった国際的都市では私と同じような背景を持つ人々がいるかもしれませんが、ノースカロライナではコミュニティを見つけるのが少し難しいです。しかし私だけが持つこの背景を活かして、多角的な視点を持つて人々と話すことができるのが強みでもあります。

マクラインさん)

シンプルですが、母国の食事や自然の美しさが恋しくなります。アメリカも多様な文化があつていい国であるからこそ、より母国のことを懐かしく感じます。

最後に、アフリカにルーツを持つアメリカの学生として日本にいる学生へメッセージをお願いします！

タハさん)

日本の若者の皆さん、いまやネットや本でいくらでも好きなだけ調べて読んだり聞いたりすることができます。しかし、1番大切なのは実際にそれを「経験」することです。頭の中での想像なのか、本当なのかは現地での経験で決まります。日本の文化とは異なるアフリカ文化で暮らすことは大きく違うでしょう。ぜひ自分自身の目で確かめてみてください。

マクラインさん)

これから海外へ挑戦しようとしている皆さん、自分の世界から一歩外へ飛び出して、冒険してみてください。異なる文化に触れることで学べるのが本当にたくさんあります。そこで新しい人々に出会い、違う言語を学ぶことは、新しく広がる世界を開く鍵になると思います。

今回は、上智大学の交換留学提携校の1つであるノースカロライナ大学シャーロット校でアフリカにルーツを持つ学生2人にインタビューを行いました。上智大学では夏期・春期休暇中に設定される短期の語学留学と、2学期間現地で暮らし勉強する長期留学の2つのプログラムがあります。ぜひ上智大学の一員として、現地でしか得られない貴重な経験や素敵な出会いをしてみてください。



アフリカWeeks第10回記念企画

アフリカWeeksは、2026年で第10回を迎えました。それを記念し、アフリカWeeksの誕生の背景を伺った山崎瑛莉先生へのインタビューと、毎年メインビジュアルをご提供くださっている山下哲司さんへのインタビューを記録しました。

山崎瑛莉先生

上智大学 文部科学省世界展開力強化事業（アフリカ）コーディネーター。
上智大学国際協力人材育成センター(SHRIC) 客員所員。アフリカWeeksを創設され、学生実行委員の統括もして下さっています。



山下哲司さん

ペーパーキルト作家。美術大学デザイン科在学時に一年間休学し、ケニアに渡航。グラフィックデザイナーとしてデザイン会社に勤務したのち、2007年の国際展覧会での作品の入賞がきっかけとなりアーティストの道へ。

アフリカWeeksはどのように始まったのでしょうか？

アフリカWeeksの歴史は、上智大学が100周年を迎えた2013年に遡ります。それまで上智の「国際」の視点は欧米にメインが置かれていましたが、この時期に、アフリカや中東、アジアにも目をむけるターニングポイントが到来しました。この流れの中で、2014年には実践型プログラム「アフリカに学ぶ」が始まりました。そして2017年に、在京アフリカ外交団主催のアフリカ・デー開催に向けて、その開催場所となる教育機関が望まれ、上智大学に打診があった際に、当時の嚆道学長が共催となることを引き受けました。このアフリカデーの上智での開催に合わせてスタートしたのが「上智大学アフリカWeeks」です。当時の嚆道佳明学長とSHRIC職員の4名を中心メンバーとしてスタートしたアフリカWeeks。現在は、学生運営実行委員会の設置や外部機関との関わりなど、多くの人々がアフリカWeeksの舞台でつながりを創っています。

学生運営実行委員会が設置されたのはいつでしたか？

アフリカWeeksでは、毎年学生運営実行委員会が組織されており、この雑誌もまさに学生実行委員が行う企画です。しかし、この学生実行委員はアフリカWeeks開始時から存在していたわけではありません。初期にアフリカWeeksの運営に携わっていた学生は、学内プログラムに参加した学生たちを中心としていて、今のように委員会の形は取っていませんでした。そして「アフリカWeeksをもっと全学的に学生の機会としたい」という思いから、2019年に「アフリカWeeks学生運営実行委員会」が誕生します。ここには、学生にとって「近い」存在としてのアフリカを伝えていきたい、という想いが込められています。

10回記念（2026）への歩みを教えてください！

コロナ禍により、2020年度は開催が見送られましたが、その後はオンラインも活用しながら、「継続すること」を大切にアフリカWeeksは受け継がれてきました。またこの時から、高校生に向けた内容も多く取り入れられるようになりました。そしてこの時期に、今回まで続く企画が登場してきます。例えば「アフリカ研究紹介」は、定番企画として継続され、2026年度でvol.5を迎えました。また、学生企画である本誌『With Africa』は2021年に創刊され、以降毎年発行が続けられています。本誌のキャラクター「ハドゥちゃん」は、この年の制作チームの学生が考案しています。2023年・24年以降になると、さらに多様な学部学科の先生方とも協働して、アフリカWeeksはその規模を拡大していきました。2024年には、2回目となるアフリカ・デーレセプションが上智大学四谷キャンパスにて行われました。2025年には、外務省によるTICAD9の公式パートナー事業に認定されました。また近年は、実行委員会に加入する学生の中に、かつてアフリカWeeksに参加者として来たことがある学生が見られるようになってきました。このような歴史の積み重ねによって、アフリカWeeksは2026年度の今年、10回記念を迎えました。

学生へのメッセージをお願いします！

アフリカWeeksは、今年までの10回の積み重ねの中で、「個人」から「みんな」への流れを辿ってきました。大学の持つ意味の一つと言える「新しい発見」をするための切り口が、アフリカには本当にたくさんあります。そして、アフリカWeeksの歴史はこれからも続いていきます。この「点」が「面」になりつつある進化の中で、学生たちには、ぜひこの進化を広げていく仲間になってほしいです。

今年のメインビジュアルの作品について

バオバブをメインにあしらった「時のない木」という作品です。バオバブという木は、表面が大きくなると同時に中身が空洞化する木であり、記憶が膨らんでいく木とも表現できる植物です。無限に続く、広がっていくという意味を込めて、アフリカやバオバブ自身の強さが見る人に向かってくるようなイメージで制作しました。バオバブは神様（聖霊）が宿るともいわれています。空洞になった中に聖霊がたくさん住んでいるんだなということを感じてもらえたら嬉しいです。

キリンをモチーフとして使ったのはなぜですか？

ケニアを訪れた際、4、5頭のキリンが均等に地平線上を並んで歩いているのを見た記憶をもとに描きました。これがまさに思い描いていたアフリカだと強く感じ、深く記憶に残っています。アフリカで動物たちを見て感じたのは、「生きているもの自体が美しい」ということです。最初は動物が好きという理由でアフリカを訪れたのですが、命の形としてさまざまな表現が見られたことに感動しましたし、動物園の動物ではないものが見られるということにアフリカの魅力が詰まっていると思います。

なにを参考にしていますか？

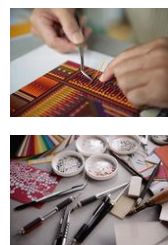
自分の記憶のみを頼りに制作しています。自分がアフリカを訪れた際に撮ってきた写真は残っていますが、プロが撮ったような写真は一枚もなく、資料として撮ってきたようなものです。写真としての価値はないのですが、写真を見れば、あの時に目に映った色の記憶が蘇ります。自分の経験を通してこの色とこの色は仲がいい、この色とこの色は仲が悪いということを理解しているため、それを上手く組み合わせてあの時の色を表現しています。色だけでなく、パーツの面積も色の印象に影響を与えます。小さな三角や丸のパーツの高さが数ミリ違うだけで全く異なって見えてきます。視覚効果は色を表現する上での楽しさでもあると思います。

記憶は日本に帰ってきてから変化しないのでしょうか？

記憶は変化してしまうものだと思います。しかし、その当時に抱いた印象であったり腑に落ちたものは変わらないのではないかと思います。納得した何かがずっとあると、それは自分のなかに残り続け変化することはありません。

見る人に伝えたいメッセージをお願いします！

基本的に、表現するということは何かを伝えなかったということです。作品には、絵に加えて詩を付けています。作者の意図を全て理解しなくてはいけないと思って見なくてはいけないと考える人もいますが、そうだとは思いません。見る人と作品を繋ぎ、見る人自身の考えをもとに物語をつくってもらうことができるように詩を添えています。これによって、見る人と作り手の距離を縮める役割を果たせたらと思っています。



アフリカWeeks



10年の軌跡

第2回

2年目の開催となった2018年のアフリカWeekは、大使館との協働などが見られ、イベントの幅が広がりました。学食では、ガボン共和国のチキンアンバを始めとするアフリカ料理を提供しました。ネルソンマンデラ生誕100周年記念シンポジウムを開催し、南アフリカの歴史を考えるきっかけになりました。

第4回

コロナ禍のため未実施となった2020年のアフリカWeeks。メインビジュアルは公開されておらず、幻のメインビジュアルと言われています。

幻のメインビジュアル

第6回

この年から、現在の定番企画である「上智大学アフリカ研究紹介」スタートしました。運営実行委員の学生が主体となって考案された企画が一番多かった年で、ASANTE PROJECTによるワークショップや、アフリカンとのトークセッションを開催しました。他にも、上智への交換留学生によるシンポジウムを開催し、日本とアフリカの双方向からの学びを実践しました。また、マリ帝国の系譜を引くグリオ歌手をお招きして「声の文化」の実演があり、文化的側面からの学びを得られる機会を作りました。

第8回

アフリカ・デーのレセプションを上智大学四谷キャンパスで開催しました。アフリカ連合（AU）設立記念日「アフリカ・デー」を記念して開催され、翌年に開催されるTICAD 9に向けてJAPAN-AFRICAの繋がりが意識されました。



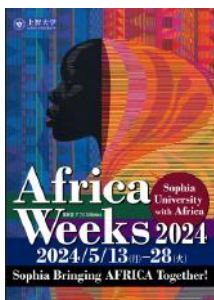
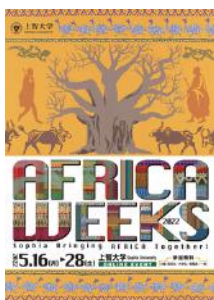
アフリカデー・レセプションの様子

第10回

アフリカWeeks10回記念の年になります。上智大学四谷キャンパスでは模擬アフリカ連合（AU）会議が開催され、それに付随した交流イベントとしてJapan-Africa Cultural Eventが行われました。多くのユース世代のアフリカンとの交流が見られました。



模擬アフリカ連合（AU）会議 & Japan-Africa Cultural Event



2017

2018

2019

2020

2021

2022

2023

2024

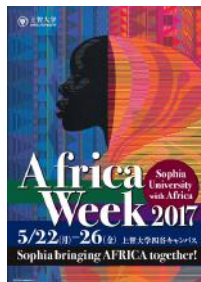
2025

2026

- ・2013：上智大学100周年
- ・2014：実践型プログラム「アフリカに学ぶ」スタート

第1回

アフリカ“Week”としてスタートしました。在京アフリカ外交団と上智大学の共催で記念講演会とレセプションを開催。教育機関でのアフリカ・デー開催という意向に応えたことで上智大学での実施が実現しました。メインビジュアルは、アフリカWeeksの考案者である山崎瑛莉先生の友人でペーパーキルト作家の山下哲司さんにご提供をお願いし、現在まで10回のご協力をいただいています。



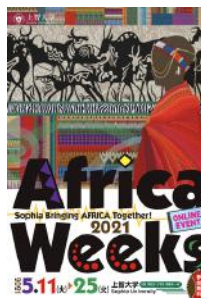
第3回

アフリカWeekからアフリカ“Weeks”へ。学生運営実行委員会が誕生した2019年。ASANTE PROJECTなどアフリカに関わる学生を中心に有志の学生で運営を始めました。アフリカWeeksをもっと学生向けにしたいという思いから、学生の意見を反映できるイベントを目指しました。「明日できることは？」と問えるような「近い」存在としてのアフリカを意識するようになった年です。



第5回

感染対策のため全イベントをオンラインで実施しました。「継続すること」を大事に、高校生との関わりを意識するようになった年でもあります。この頃から高校生に向けた内容も取り込むようになり、上智大学でできる学びや大学での具体的な活動を、外部に向けてたくさん示すようになりました。また、学生運営実行委員会は公募で募るようになり、学生企画の雑誌「With Africa」がスタートするなど学生が主体となってアフリカWeeksを作り上げるようになりました。



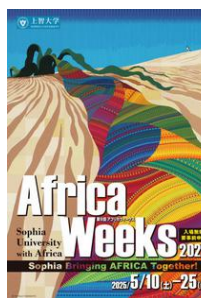
第7回

2023年以降は、外部機関からも企画の提案をいただけるようになり、大学イベントとしてのアフリカWeeksが、学外にも国際的なイベントとして認知されるようになったターニングポイントになります。



第9回

2025年は8月に横浜でTICAD 9が開催されたため、TICADとの協働が見られた年のアフリカWeeksでした。また「学んだことを形にする」という目的のもと、イベント内で成果物の作成を取り入れ始めた年です。「アフリカWeeksに参加したことがきっかけ」「雑誌」から実行委員への参加者が増えた年でもあり、学生運営実行委員会の幅が広がり、多様性も生まれました。



Talk with African Youthの時間に作成したバオバブの木



第11回以降のアフリカWeeksもどうぞよろしくお願いいたします！



アフリカWeeks2026開催報告

上智大学は今年で記念すべき第10回目となるアフリカWeeks2026を5月8日から5月25日にかけて開催しました。

数多くの参加者が講演会やシンポジウム、学生企画など多彩なプログラムに参加し、

アフリカ地域への理解を深めました。

このページではアフリカWeeksに参加した参加者の方々の声をお届けします。



5/9に開催された第3回私とアフリカではアフリカ渡航を経験した上智生と卒業生が自らの経験を共有しました。

今回初めてアフリカウィークに参加させていただき、アフリカでの活動の話を聞いて、どこか私が「アフリカにはこういう発展途上さがある、それをこう支援しています!」というような話だけを求めていて、その地で実際に生きる人々のことを考えていなかったのかもしれない、ということに気づかされました。(「第3回私とアフリカ」参加者)

アフリカに対する考え方が変わり、より知りたくなりました。私がこれまで、あまりアフリカに興味がなかったのは、なにも知らなかったからなのだと気づくことができました。(「第3回私とアフリカ」参加者)

アフリカを一つの大陸として一括りにせず、それぞれの国の人々と丁寧に向き合い、関係を作っていく姿に感動しました。国を超えた絆や言語の壁を超えた繋がりが素敵だなと思いました。(「第3回私とアフリカ」参加者)

若者の力の重要さを強く感じました。(「模擬AU」観覧者)

若者の参加が排除されていることが、多くの国で話されていましたが、解決に向けた懸命な気持ちが伺えました。(「模擬AU」観覧者)

一生の思い出ができました! (“Africa-Japan Cultural Event”参加者)

It was my first time to join and I had so much fun, memories, and lessons that I learned from the experience. I'm so glad that I join and I would definitely join more in the future. (“Africa-Japan Cultural Event”参加者)



5月の16日から17日にかけて行われた模擬アフリカ連合(模擬AU)では、日本とアフリカの学生が真剣に討論を行いました。総会後に開かれたAfrica-Japan Cultural Eventでは模擬AUに参加した学生が交流し、互いの文化について理解を深め合いました。



他にも様々な企画を開催しました!

ハドゥちゃん
With AFRICA初年度からの
キャラクター

今回の機会により国外について興味を持った。もっと自分で情報を集めてこのような機会でいろんな話を聞きそして講義を受けたいと思った。(「上智大学アフリカ研究紹介」参加者)

今日のセミナーを伺って、今現在、日本企業や大学や開発銀行などを通してアフリカとの関係が様々に深まっていること、またそれぞれのセクターでいろいろご尽力されていることを知りました。(「アフリカにおけるインフラセクターのパートナーシップ」参加者)

チュニジアの歴史を知り、世界史で習った知識と繋がったため、非常に興味深かった。(「駐日チュニジア大使講演会」参加者)

あまり訪れることがないアフリカを身近に感じることができる機会になりました。チュニジアの国際交流を学ぶことができ広い世界を知ることができました。(「駐日チュニジア大使講演会」参加者)

人生で初めて大学に足を運んで、たくさんの先生方や専門的な方々のお話をグローバルな視点で聞くことができとても学びになりました。それと同時に、どんなルーツでも言語でも同じ地球で生きる仲間として共に課題を解決していくことの素晴らしさを改めて感じました。(「教育現場におけるAI活用の政策・倫理・教育インパクト」参加者)

アフリカの複数の大学の様子を知ることができて、大変、有意義でした。年齢や食べ物の心配はありますが、短期でも留学したいです。(“SAFICs cultural seminar”参加者)

第10回 アフリカWeeks 2026
2026年5月8日(金)~25日(月)
上智大学アフリカ研究紹介
上智大学は、アフリカ地域に深く関わり、育ち、働く人々とともに、アフリカ地域の発展に貢献し、未来を築いていくことを目指し、今年度より「第10回アフリカWeeks」を開催します。講演会、シンポジウムや学生企画など、多彩なプログラムを実施します。

参加無料
要事前申込

9日(土) 14:00~16:30 / 日本語
第3回 私とアフリカ
「アフリカ渡航への第一歩、私とアフリカ(after after)」をテーマに、実際にアフリカに渡航した在学生や卒業生の体験談などを聴いて、アフリカへの関わり方やその可能性について一緒に考えます。

11日(日) 19:00~21:00 / 日本語・英語
上智大学アフリカ研究紹介
本学の様々な学部学科教員がアフリカ研究の魅力や機微をお話します。また、SAFICsのアプローチなどについても紹介します。

13日(月) 19:00~21:00 / 日本語・英語(同時通訳あり)
アフリカにおけるインフラセクターのパートナーシップ: マルチセクター人材育成と相互理解の新たな地平
アフリカにおける持続可能な発展の基盤となるインフラセクター(モビリティ・ロジスティクス)をめぐり、産官学の連携や人材育成・人材のあり方を議論します。特に、アフリカにおけるインフラセクターとアフリカにおける日本研究の発展を支え、両者の日本へのアフリカ渡航や人材育成について考えます。

17日(金) 9:00~12:00 / 日本語・英語(同時通訳あり) 学生限定 13:00~15:00
第3回 模擬アフリカ連合(AU)会議 Japan-Africa Cultural Event
日本とアフリカの学生が外交官となり議論する「模擬AU」を開催! 10日は非公開の分科会、17日は一般公開の総会を実施します。10日午後には学生限定の交流イベント(Cultural Event)も開催。

18日(土) 17:30~19:00 / 英語
駐日チュニジア大使講演会
2026年は日本とチュニジアの国交40周年です。チュニジアの文化や歴史を学びながら、今後の展望について議論します。

19日(日) 19:00~21:00 / 日本語・英語(同時通訳あり)
教育現場におけるAI活用の政策・倫理・教育インパクト
AIはアフリカ社会にも急速に浸透しています。しかし、多言語社会・多文化社会においてその活用には様々な課題も生じます。本シンポジウムでは、AI時代におけるアフリカの現状と今後の教育の在り方について議論します。

24日(金) 17:30~19:00 / 日本語
アフリカの水と暮らし
～乾涸地の暮らしからワイン産地まで～
南アフリカをその中心にアフリカの水と暮らしがどのように支えられているのか、アフリカ内陸部から海まで多様な気候・地形・文化・社会・経済・政治・環境など様々な要素を絡めてアフリカの水と暮らしについて議論します。

25日(土) 19:00~21:00 / 英語
SAFICs cultural seminars in Africa Weeks
SAFICsは産官学と協働を軸とした、産官学の文化や大学・研究紹介を行います。

「上智とアフリカ」展 (5月11日~8月下旬) 6号館1階展示スペース
本展覧会では、これまでアフリカとの関わりについて紹介し、上智大学とアフリカの豊かな交流の歴史と未来への可能性を伝えていきます。

Sophia-Africa Future Initiatives for Collaborations: Letters from our seven partner universities across six African countries
5月8日(金)~22日(金) / 2号館1階展示スペース
SAFICs連携校の大学紹介や教職員・学生からのメッセージを展示します。

学生限定企画 With Africa 8日(金)10:00~12:00 総会後中!

記念すべき第10回を迎えました

アフリカWeeksは今年で記念すべき第10回を迎えました。
これまで関わってくださったすべての方への感謝を込めて、
アフリカ各地で使われているうちのいくつかの言語で「ありがとう」をまとめました。
(Google翻訳使用)



Saha
(ベルベル語)



Shukran
(アラビア語)



Jërëjër
(ウォロフ語)

Na gode
(ハウサ語)

E se
(ヨルバ語)

Daalu
(イボ語)

Matondo
(リンガラ語)

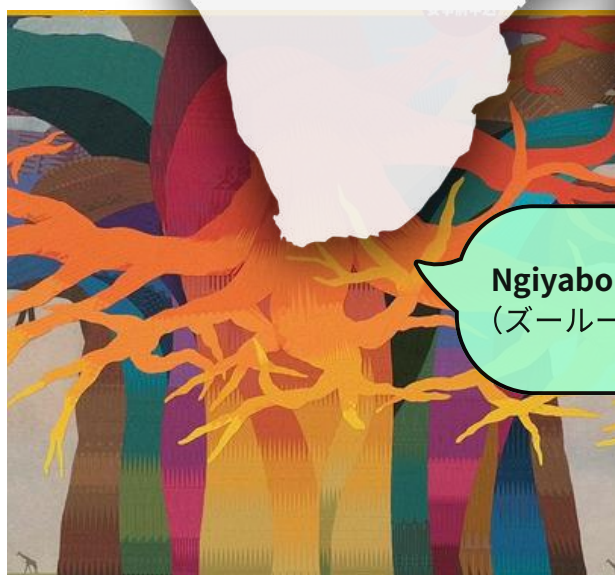
Ameseginalehu
(アムハラ語)

Mahadsanid
(ソマリ語)

Galatoomi
(オロモ語)

Asante
(スワヒリ語)

ありがとう



Ngiyabonga
(ズールー語)



SOPHIA AFRICA WEEKS

参考文献

- ・ムンギ・エンゴマニ, 2020, 『ウブントゥ 自分も人も幸せにする「アフリカ流14の知恵」』 パンローリング：東京.
- ・アンヌ・グロフィレー, 2019, 『ワックスプリント 世界を旅したアフリカ布の歴史と特色』 グラフィック社：東京.
- ・並木誠士, 上田文, 青木美保子, 2019, 『アフリカプリント 京都で生まれた布物語』 青幻舎：京都.
- ・カラバッシュ メニュー (2026年4月22日参照)

STAFF

丹羽奏絵、堀米ありさ、市村優奈

青柳寿咲、米倉心之介、小川瑠音、浅井唯子、内田めい、辻みこと、社方菜南花、渋谷大誠、武藤三紗、山本杏珠、大橋悠生



上智大学

Sophia University